

製作／東映株式会社
東映動画株式会社

ゲゲゲの鬼太郎

妖怪特急！まぼろしの汽車

製作

東映株式会社

東映動画株式会社

製作

高岩淡

泊懋

企画

清水慎治

蛭田成一

原作　水木しげる

講談社（テレビマガジン　たのしい幼稚園　おともだち　コミックボンボン）掲載

❹

脚本

大橋志吉

❺

音楽　和田薫

キャラクターデザイン
作画監督

荒木伸吾
姫野美智

美術監督

徳重賢

製作担当

本間修

監督

吉沢孝男

原

画

動

画

トレスチーフ	
カラーチーフ	
ゼログラフ	
特殊効果	
仕上検査	板坂泰江
背景	

監督助手	広嶋秀樹
製作進行	
仕上進行	
美術進行	
記録	小川真美子
プロデューサー補佐	有原美千代

撮影監督	撮影	編集	ネガ編集	録音	選曲	音響効果	現像	宣伝

【オープニング】

ゲゲゲの鬼太郎

作詞／水木しげる
作曲／いずみたく
唄・編曲／憂　歌　団
（wea japan）

ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
朝(あさ)は寝床(ねどこ)で　グーグーグー
たのしいな　たのしいな
おばけにゃ　学校(がっこう)もしけんも
なんにもない
ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
みんなで歌(うた)おう　ゲゲゲのゲー

ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
昼(ひる)はのんびり　お散歩(さんぽ)だ
たのしいな　たのしいな
おばけにゃ　会社(かいしゃ)も仕事(しごと)も
なんにもない
ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
みんなで歌(うた)おう　ゲゲゲのゲー

ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
夜(よる)は墓場(はかば)で　運動会(うんどうかい)
たのしいな　たのしいな
おばけは　死(し)なない　病気(びょうき)も
なんにもない
ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
みんなで歌(うた)おう　ゲゲゲのゲー

【エンディング】

カランコロンのうた

作詞／水 木 し げ る
作曲／い ず み た く
唄・編曲／憂　歌　団
（wea japan）

カランコロン　カランカランコロン
カランコロン　カランカランコロン
おばけがポストに　手紙(てがみ)を入(い)れりゃ
どこかで鬼太郎(きたろう)のゲタの音(おと)

カランコロン　カランカランコロン
カランコロン　カランカランコロン
ドッタンバッタ　ゴロゴロ
ギャアギャア　ギーギー　ドタドタ
どこかでおばけの　うめき声(ごえ)

カランコロン　カランカランコロン
カランコロン　カランカランコロン
ゲゲゲの鬼太郎(きたろう)　たたえる虫(むし)たち
どこかへ鬼太郎(きたろう)は　消(き)えて行(ゆ)く
カランコロン　カランカランコロン
カランコロン　カランカランコロン

登場キャラクター

役名	摘要	声の出演者
鬼太郎		松岡洋子
目玉のおやじ		田の中勇
ネズミ男		千葉繁
猫娘		西村ちなみ
砂掛け婆		山本圭子
子泣き爺		塩屋浩三
一反木綿		龍田直樹
○		
吸血鬼		
フランケンシュタイン		
狼男		

魔女

○

閻魔大王

1 三途の川

ビュオオオーと風が吹き抜ける。

2 荒野

――荒涼。

頭蓋骨等が転がっている。
曲がりくねった裸の木。
そこにたくさんのカラス。
『ギャー、ギャー、ギャー』と、いきなりカラスが舞う。
すると、シュポポポーと汽笛の音。
ゴガーっと蒸気機関車が、暴走。
裸の木をなぎ倒して進む。
機関車は、小山に激突して、その山肌を削り取り、突進。

3 下町

4

——日常。

自転車の豆腐屋が、のんびりとラッパを吹く。

ネズミ男が、自動販売機の底を覗いている。

ネズミ男「あー、小銭でも落ちてねーかな——」

と、そこにいきなり汽笛の音。

そして、ガタンゴトン、ガタンゴトンと音。

ネズミ男「——えっ、何だ——!?」

古めかしい大きなトタンの倉庫の壁。

そこにグワッと異空間が開くと、ズオーッと汽車が出現。

ネズミ男の目の前を、グワワワーッと突進。

ネズミ男「ギャー!」

煙を大量に吐きつつ進む汽車。

タイトル

『妖怪特急・まぼろしの汽車』

5

鬼太郎の家・窓辺の所・夕方

夕陽を浴びつつ、お碗に入ってうたた寝をしている目玉。

目　玉「うーん――」

するとと、外から、煙のようなモノが飛んで来て、スウーッと目玉の中へ。

ビクンとなる目玉。

目　玉「んっ――!?」

6

目玉の夢

目玉の前には、怖い顔をした閻魔大王。

タイトル『閻魔大王』

閻魔大王「おー――!」

目　玉「(はっ!?　となり) こっ、これは、これは閻魔大王様――。いったい何事でございますか?」

閻魔大王「よく聞くがいい。起きてはならぬ、大事件が起きてしまったのだ――」

目　玉「大事件――!?」

閻魔大王「頭の痛い事だ。(溜息をして) 実は、地獄に落としていた西洋妖怪どもが、逃げだしてしまったのだ――」

目　玉「西洋妖怪――!?」

閻魔大王「しかも、封印しておいた、あのまぼろしの汽車に乗ってな――」

目　玉「(ビックリして) なんと、まぼろしの汽車で――」

閻魔大王「そうだ。まぼろしの汽車は、どこへでも行ける。現世だろうと、あの世だろうと。過去にも、未来にも――。自由自在だ」

目　玉「はい――」

閻魔大王「奴らは、暗黒世界に向かっておる。そして、そこで、世界中の妖怪を支配するパワーを手に入れようとしているようじゃ」

目　玉「なんと――」

閻魔大王「そんな事を許してはならぬ。なんとしても、阻止するのだ!」

バンと才槌を叩く。

目　玉「そんな大それた事を――!?」

閻魔大王「頼めるのは、お前たちしかいない。頼んだぞ!」

バンバンと、怒ったように才槌を叩く。

7　鬼太郎の家・中

ハッと目が覚める目玉。

目　玉「鬼太郎、大変じゃ――」

振り返る鬼太郎。

鬼太郎「どうしたんですか？　父さん――」

と、そこへ、ドタバタと駆け込んで来るのは、ネズミ男。

ネズミ男「おーい、鬼太郎、大変だァァァァ！　街の中を変な汽車が暴走してるぞ！」

鬼太郎「えっ――!?　汽車が――」

ネズミ男「おう、目の前をシュポポポーって。俺っちなんか、あやうく、轢かれる所だったぜー」

目玉、ピョコンとお碗から飛び出て、

目　玉「鬼太郎、それじゃ――！」

8　上空

――夕陽。

鬼太郎の乗った一反木綿が飛ぶ。

鬼太郎「とにかく、急いでくれ――」

一反木綿「わかりもした――」

その後を、カラスに吊り下げられた子泣き爺、砂掛け婆、猫娘が追う。

子泣き爺「西洋妖怪が、まぼろしの汽車にのお――」

砂掛け婆「それは、一大事じゃ――」

と、地上をジタバタと走っているのは、ネズミ男。

ネズミ男「おーい、待ってくれー、俺を置いていくなーァァァ――！」

9 街

鬼太郎たちが飛んで来る。

すると、民家の屋根の上を走っている汽車。

十両編成の蒸気機関車。

鬼太郎「あれだ――。一反木綿、向かってくれ――」

目　玉「鬼太郎、待て――」
鬼太郎「えっ――!?」
目　玉「西洋妖怪が乗っているとなると、日本中の妖怪の力を借りなければ太刀打ちできん。様子を見るんじゃ――」
鬼太郎「父さん、そんな事を云ってられませんよ」

一反木綿に合図を送ると、汽車の方へ。
後に続く砂掛け婆たち。
すると、車両の一つから、スワーッと何やら飛んで来る。
それは、箒にまたがった魔女である。
タイトル『魔女』

魔　女「イヒヒヒヒ、おいでなすったね、日本の妖怪たち――」

10　汽車の中

不気味なシルエットが浮かび上がる。
窓からは、鬼太郎たちの姿が見える。

シルエットの声「フッフフフ――。日本に向けて走らせれば、来ると思った。鬼

太郎よ、お前の妖力がどうしても必要なのだ」

11 上空

砂掛け婆たちに向かって来る魔女。

猫　娘「うわ――」

魔　女「イヒヒヒヒ――」

魔女は、指の先でカラスからのロープを、次々に切って行く。

『うわー!?』『おわー!?』『キャー!?』と次々に落下して行く砂掛け婆、子泣き爺、猫娘。

そのまま、汽車の屋根の上へ。

鬼太郎「ちっ――」

一反木綿「なんばすっと――」

と、一反木綿は、魔女に向かって行く。

魔　女「オラオラオラー――」

ヒュンと、一反木綿と魔女が交差。

ズバッと、切られている一反木綿。

一反木綿「おわ――!?」
魔　女「そら、そら、そら――！」
　と、魔女は、一反木綿の身体を切り刻む。
一反木綿「うわわわー――!?」
　一反木綿と鬼太郎も、そのまま汽車の屋根の上に落下。
魔　女「ヒヒヒヒ――。手応えがないねー」
　と、遅れてやって来るのは、ネズミ男。
　カラスに吊されて。
ネズミ男「おーい、みんなー――」
　後ろから、シュワンと来るのは、魔女。
　ネズミ男のロープも切っている。
ネズミ男「おわ、おわ、おわ――!?　落ちるー!?」
　空中で、ジタバタと暴れるが、マントをバサッと広げる。
　すると、パラシュートのようになる。
ネズミ男「へへん。何にでも使える俺っちの万能マント――」
魔　女「うん、気に入った――」
　と、魔女は、ヒョイとネズミ男を箒の上へ。

ネズミ男「えっ――!?」

12 街・夜

通勤客を乗せた満員電車が走る。
その上、横切るように走る汽車。

13 車両・中

窓から降りて来る砂掛け婆や鬼太郎たち。
切れた一反木綿を持っている猫娘。

目　玉「一反木綿は、手当てをすれば、大丈夫じゃろう――」

鬼太郎たち、車内を見渡せば、ガランとしている。

砂掛け婆「でも、西洋妖怪って、あの魔女以外、どんな妖怪が乗っているんじゃ?」

目　玉「うーん――」

と、前の車両の方から、『ウオオオー!』と獣の叫び声。
顔を見合わせる鬼太郎たち。

砂掛け婆「なっ、なんじゃ――？」

14 前の車両

連結部の所から顔を出す鬼太郎たち。
と、座席の上に立っている男が。

男「ウオオオオー！」
月光を浴びて吼える男。

男「ウオオオオー――！」
すると、男の全身にモジャモジャと毛。
そして、耳がピンと立つ。鼻がグオッと前に持ち上がる。牙もはえて来て、――狼男となる。
タイトル『狼男』

狼　男「オオー！」
と、鬼太郎の方へ突進。
そんな狼男に立ち向かって行くのは、子泣き爺。
石になって狼男にしがみつく。

子泣き爺「鬼太郎、先に行くんじゃ。この汽車を止めるのが先じゃ」
鬼太郎「はい――」
ゴロゴロと揉み合う子泣き爺と狼男。

15 新宿の高層ビル・夜

その間を、突進していく汽車。
ビルとビルの間を縫うように。

16 車両

座席に座って、一反木綿を手当てしている猫娘。
一反木綿「すまんばい――」
猫娘「いいのよ。――すぐに治るからね」
と、頭を針で掻いたりして、一反木綿を縫っていく。その手慣れた手つき。
と、猫娘が横を見れば、そこにも、縫い物の跡も生々しい顔が。

猫　娘「あれ――⁉　あんたも縫ってもらったの――」
　と、縫い跡を撫でて、
猫　娘「ダメね。縫い方が雑よ。こうやって、隠し縫いにしなきゃ――」
　と、一反木綿の縫い跡を見せる。
　が、それはフランケンシュタイン。
フランケン「うー――！」
　タイトル『フランケンシュタイン』
猫　娘「(悲鳴) キャー――！」
　フランケンは、猫娘の首に手を掛けると、グワッと持ち上げる。
猫　娘「くっくっくっ――」
　ジタバタと暴れる。
　砂掛け婆が駆け込んで来る。
砂かけ婆「猫娘、どした――？」
　フランケンは、猫娘を、バーンと砂掛け婆の方へ投げ飛ばす。
　ドサドサと倒れる猫娘や砂掛け婆。
猫娘・砂掛け婆「アギャギャー！」

17

上空

汽車の上を飛ぶのは、ネズミ男を乗せた魔女の箒。
ヒュィィィンとスピードを上げて。
それが、ビルに激突しそうになる。

ネズミ男「(恐怖で) おわわわー――!?」
ビビリまくりのネズミ男。
魔　女「どうだい、楽しいかい――?」
ネズミ男「うわー――」
魔　女「あんた、なかなかハンサムだから。ホ、レ、ター―」
振り返って、ニヤリと笑う。
ネズミ男「(背筋がゾゾゾーッとなり) ぎゃわわわー――!?」

18

前方の車両

鬼太郎が来る。
と、突然、前から、『キー、キー、キー』とコウモリの群が。

鬼太郎「うわ――⁉」
　と、身をかわすと、
鬼太郎「そりゃ――！」
　ゲタを飛ばす。そのゲタが、次々にコウモリに激突。吹っ飛ぶコウモリたち。
鬼太郎「くっ――」
　『フッフフフフフ――』と笑い声。
　現れるのは、吸血鬼。
　タイトル『吸血鬼』
吸血鬼「さすがに、なかなかやるな！」
鬼太郎「この汽車を止めるんだ！」
吸血鬼「そうは、いかん」
　と、ステッキを振り回しつつ鬼太郎に突進。
鬼太郎「髪の毛針――！」
　鬼太郎の髪の毛針。それを、マントで受ける吸血鬼。
　弾き飛んでいる髪の毛針。
吸血鬼「（余裕の笑み）フッ――」

鬼太郎「タッ――」
と、ゲタを飛ばす。
すると、吸血鬼は、シルクハットをブーメランのように飛ばす。
カキーンと、ゲタは弾き飛ばされて壁に激突。
鬼太郎「(焦り)あっ――!?」
吸血鬼「思った通りの妖力だ。だが、俺様にはかなわない――」
ステッキを振るう吸血鬼。
スタッと避けている鬼太郎。
鬼太郎「チャンチャンコ――!」
と、チャンチャンコを飛ばす。
ギュインと飛ぶチャンチャンコ。
すると、箒に乗った魔女(ネズミ男も乗せたまま)が、窓から、ビュワーと入って来ると、チャンチャンコをキャッチ。
魔　女「いただき――」
再び、窓から、汽車の外へ。
鬼太郎「しまった――」
吸血鬼「フッフフフフ――。もう、こちらのものだ!」

バシッとステッキをふるう。
それが鬼太郎に命中。
バーンと飛ばされている鬼太郎。
ガコンと座席の一つに激突。

鬼太郎「うぐ――!?」

吸血鬼「それ――」

と、コウモリがあちこちから飛来し、倒れている鬼太郎の体を覆い尽くす。

鬼太郎「うっ、うっ、うっ――」

座席の上から見ている目玉。

目　玉「(心配そうに) 鬼太郎――!?」

吸血鬼が、マントで鬼太郎の体を覆う。

吸血鬼「とりゃ――!」

マントを取り、コウモリたちが去る。
すると、鬼太郎の体は、丸い石になっている。

吸血鬼「フッフフフ――。最高の妖怪石炭が手に入った――」

目　玉「うわわわ――!?　鬼太郎!?」

コウモリは、目玉の方にも。
慌てて逃げる目玉。

19 後ろの車両

フランケンに追われて、逃げて来る子泣き爺、砂掛け婆、猫娘、目玉。
子泣き爺たちは、ボロボロである。

フランケン「おおおおー――!?」
子泣き爺たち、最後の車両に飛び込む。
と、前の方から、吸血鬼の声。

吸血鬼の声「フランケン、もういい。そいつらに、用はない――」
フランケン「うー――」
根めしげに最後の車両を見るが、近くにある座席をバコンバコンと持ち上げると、入り口の所を塞ぐ。

20 前の車両

石炭鬼太郎を持ち上げて、大喜びの吸血鬼、狼男、フランケン。

吸血鬼「鬼太郎の妖怪石炭を手に入れた」

狼　男「これで、暗黒空間に行く事が出来ますね」

フランケン「ウッウッウッウッー――」

吸血鬼「そうだ――。妖力たっぷりの鬼太郎石炭があれば、暗黒空間まで一直線だ。フッフフフ――」

狼　男「クックククク――」

21　街

汽車がグゴゴゴーと遠ざかって行く。

それを追うように、魔女とネズミ男を乗せた箒が飛ぶ。

22　運転席

吸血鬼が釜の蓋を開ける。

中は、真っ赤に燃えている。

フランケンが、その中に石炭鬼太郎を投げ入れる。
吸血鬼がカチャリと蓋を閉める。

×　×　×

――中。
真っ赤に燃える中に、石炭鬼太郎。それも真っ赤になる。
グガーッとさらに燃え上がる。

23	走る汽車

ポポーと力強い汽笛。
グガガガガーと、一段とスピードを上げる汽車。

24	食堂車

吸血鬼が、笑いつつ、
吸血鬼「これで、世界中の妖怪を支配する事が出来る。俺たちの天下だ。フッフフフ」

と、ワインを呑む。

25 ハイウェイ

ライトをつけた車が通行。
その上を、スピードを上げた汽車が走る。

26 最後の車両

ガンガンと塞がれた座席を叩いている猫娘。

猫　娘「閉じこめられちゃったよ」
砂掛け婆「このままじゃ、わしたちも暗黒空間に――」
子泣き爺「一体、どーしたらいいんじゃ」
猫　娘「それに、肝心かなめの鬼太郎がやられちゃって――」
子泣き爺「それじゃ――」
砂掛け婆「目玉のオヤジが云うように、日本中の妖怪を呼ぶべきだったな――」
猫　娘「今さら、そんな事云っても――」

目　玉「うーん――」

腕組みをして考え込んだまま。

27

コパーメント

ベッタリと魔女につきまとわれているネズミ男。

魔　女「私のスイート・ハニー――」

ネズミ男「やめてくれって――」

魔女は、ネズミ男の頬に自分の頬をつけてスリスリとやる。

ネズミ男「(モノ) こうなったら、臭い息攻撃で――」

ハーっと息を魔女に吹きかける。

魔　女「(クンクンと嗅ぎ) あら、香水のような香――」

ネズミ男「ええーっ⁉　効かねーのか⁉」

魔　女「だって、ほら――」

ヒキガエルの干したのや蛇の頭を出す。

魔　女「私、こう云うの大好物だし――」

ネズミ男「うわわわわー――⁉」

魔　女「（妖艶に微笑み）私たち気が合うのよ」

28 最後の車両

考え込んでいる目玉。

目　玉「うーん――」

×　×　×

フラッシュバック的な回想。

閻魔大王「まぼろしの汽車は、どこへでも行ける。現世だろうと、あの世だろうと。過去にも、未来にもな――」

×　×　×

目玉が、『うむ！』と頷くと、

目　玉「こうなったら、わしの力で、このまぼろしの汽車を――、過去に向かって走らせる――」

猫　娘「過去に――!?　そんな事ができるの？」

目　玉「うむ、行き先を変えるんじゃよ。鬼太郎がやられる前の過去に行くんじゃ」

砂掛け婆「（心配そうに）しかし、できるのかね――」

目　玉「鬼太郎を救う為には、それしかないんじゃ――」
子泣き爺「でも――」
目　玉「子供の危機を救うのは、父親としての役目じゃ――。わしがどうなろうと、かまわん――！」

29　郊外の遊園地

その近くを走る汽車。

30　汽車の屋根

そこを這いつくばるように進む猫娘。
猫娘の肩には、目玉。
猫　娘「オヤジさん、大丈夫――」
目　玉「ああ――」
その背後には、観覧車。
が、猫娘は、ズルと足をすべらせる。

猫　娘「キャ――――！」

猫娘、慌てて、屋根を掴む。

31　食堂車

ワイングラスをぶつけあって、祝杯を上げている吸血鬼たち。

窓の所には、猫娘の足が。

が、吸血鬼が振り返った時には、引っ込んでいる。

32　汽車の屋根

進む猫娘。

汽車は、ジェットコースターの下をくぐって行く。

思わず身をかがめている猫娘。

33　車両と車両の間

34 山

猫娘が、バッとジャンプする。

35 汽車の上

汽車は、山の方へ走る。

進む猫娘と目玉。

と、見れば、前方の谷の一部、グワワワワッと空間が開く。

そこからは、渦巻く暗黒空間が。

猫　娘「あれは――?」

目　玉「いかん、暗黒空間じゃ――」

36 食堂車

吸血鬼たちも、窓からは、ポッカリと開いた暗黒空間を見る。

吸血鬼「もうすぐだぞー――」
狼　男「ヒャホッホホー――」

37　釜の中

真っ赤に燃えている石炭鬼太郎。

38　上空

汽車は、暗黒空間に向かってスピードを上げる。

39　運転席

窓を伝って降りて来る猫娘と目玉。

猫　娘「オヤジさん、早く、早く――」

目玉、レバーの前に行くと、

目　玉「これじゃ――」

目玉、必死にレバーを押す。
猫娘も手伝う。
猫　娘「くっくっくっ――」
目　玉「鬼太郎を助けなければ――！」

40　谷

汽車は、暗黒空間に向かって一直線。

41　前の車両

奇声を上げている吸血鬼たち。
吸血鬼「(興奮)――！」

42　運転席

必死にレバーを引いている目玉に猫娘。

猫　娘「固いよ――」

目　玉「こうなったら、わしの念力で――。うっ、ううう――」

少しづつレバーが動く。

43　谷

汽車は、暗黒空間に突っ込んで行きそうになる。

44　運転席

必死にレバーを動かしている猫娘に目玉。

目　玉「そりゃ――！」

ガコンとレバーは動く。

45　谷

汽車は、暗黒空間の直前で、突然、グギギギギーッと向きを変える。

軋む機械の音。
車輪からは、キキキーと火花。

46 食堂車

その衝撃で、ガガーンと、壁にぶつかっている吸血鬼たち。
フランケン「おわわわ――!」

47 コパーメント

ドワーッと吹っ飛ばされているネズミ男と魔女。

48 最後の車両

グワワーッと壁に激突している砂掛け婆や子泣き爺。
と、その衝撃で、塞がれていた座席が崩れる。

49 食堂車

吸血鬼が起き上がり、

吸血鬼「一体、何が起きたんだ――!?」

50 運転席

さらに、レバーを引いている目玉と猫娘。

51 食堂車

窓の外を見ていた吸血鬼。

吸血鬼「いっ、いったい、どうなったんだ。とっくに、暗黒空間に突入してもいい時間のはず――」

と、懐中時計を出して見る。

すると、針が逆にまわっている。

吸血鬼、『は!?』となり、外を見て、

吸血鬼「いっ、いかん――。この汽車は、過去に向かって走っている――」
狼　男「過去に――!?」
吸血鬼「止めねば――!」
狼男が慌てて、運転席の方へ。

52 コパーメント

逆さに転がったままの魔女やネズミ男。
ネズミ男の前には、チャンチャンチャンコが。
と、チャンチャンコがフワッと浮き上がると、ヒューと飛んで行く。
ネズミ男「おっ――!?」

53 運転席

来る狼男。
と、レバーにしがみついている目玉と猫娘。
狼　男「お前たち――」

目　玉「あぎゃ――!?」
　　と、目玉を弾き飛ばす。
　　そして、バコーンと猫娘を投げ飛ばしている。
猫　娘「キャ――!」
　　と、その時、『乱暴は止めろ』と声。
狼　男「んっ――!?」
　　キーと釜の扉が開くと、ボワッと飛び出て来るのは、真っ赤な鬼太郎。
　　体は元に戻っている。
　　クルクルっとジャンプすると、猫娘を庇うように狼男の前へ。
狼　男「あっ――!?」
　　そこへ飛んで来るチャンチャンコ。
　　鬼太郎、バシッとそれを着る。
　　猫娘が、倒れている目玉を助ける。
猫　娘「オヤジさん――」
目　玉「うーん――」
鬼太郎「よくも、父さんを――」
　　グワッと、狼男にゲタを飛ばす。

炎を上げて飛ぶゲタ。

狼　男「グワッ――!?」

後ろにすっとんでいる。

54　車両

そこを走る子泣き爺たち。

砂掛け婆「きっと、目玉のオヤジが、汽車の向きを変えたんじゃ」

子泣き爺「その苦労を無駄にするな――」

一反木綿「わかりもした――」

一反木綿も飛んでいる。

55　運転席の後ろの車両

鬼太郎が来る。が、その前には、吸血鬼が。

吸血鬼「鬼太郎――」

鬼太郎「お前たちの好きにはさせないぞ！」

吸血鬼「くっ――」
と、鬼太郎に向かって行く吸血鬼。

56 コパーメント

必死に逃げようとしているネズミ男。
魔女は、ネズミ男のマントの端を掴む。
魔　女「ダーリン、急にいなくなるなんて、冷たいじゃないの――」
ネズミ男「お前なんかのダーリンじゃねー。これをくらえ――」
ペロリとマントをめくると。
ボムッと強烈なオナラ。それが、魔女の顔に。
ブオッと吹っ飛ばされている魔女。
ネズミ男「一週間溜めて、熟成させた特性オナラだ！」
魔　女「キクゥゥゥゥ――！」

57 別の車両

フランケンたちの前には、子泣き爺たち。

子泣き爺、石になってフランケンにしがみつく。

そんなフランケンの肩をつつく手。

振り返れば、そこには、猫娘。

猫　娘「顔の傷、ふやしてやる！」

シャキンと伸びる爪。

ヒュンヒュンと爪が舞う。

フランケンの縫われた所の糸が切れる。

皮膚がめくれそうになるのを慌てて押さえる。

子泣き爺「どうじゃ――」

フランケン「うおおおお――」

猫　娘「だから、隠し縫いじゃなきゃダメだって云ったでしょ」

と、飛んで来るのは一反木綿。

一反木綿「くらうでごわす」

と、ハンマーを振り上げると、フランケンのこめかみから出ているビスに向かって打つ。

ガコーンと、ビスが移動。

フランケン「うっうううう――」

そこへ、ドシーンと岩になった子泣き爺が。

子泣き爺「ほーれ――！」

58

汽車の屋根

対峙している鬼太郎と吸血鬼。

ステッキを振るう吸血鬼。

鬼太郎、オカリナを出すと、それをステッキに。

カキンと吸血鬼のステッキを受けている鬼太郎。

カキンカキンとやりあう。

ヒュンヒュンと巧みなジャンプで吸血鬼のステッキを避けている鬼太郎。

鬼太郎の反撃。

吸血鬼「くっ――」

59

運転席

ムックリと起き上がった狼男の前には、砂掛け婆。

狼　男「くっ――。おおおおー――！」

一吼えすると、グガーッと牙を向いて、砂掛け婆の方に突進。

と、その前に、ぬりかべが出現。

ぬりかべ「ぬりかべ――！」

ぬりかべにバゴーンと弾き返される狼男。

と、狼男の体が、レバーに激突。

バコンと折れてしまうレバー。

ガガンと汽車に衝撃が。

60　上空

汽車は、ガガガガガーッと蛇行運転。

61　汽車の上

戦っていた鬼太郎と吸血鬼、バランスを崩す。

鬼太郎「うわっ――」

62

運転席

外を見ていた目玉。

目　玉「いかん。まぼろしの汽車が暴走しはじめた。どこへ行くかわからんぞ」

そこへ走り込んで来る猫娘。

猫　娘「えっ――!?」

と、頭を振っている狼男。

狼　男「くう―――」

砂掛け婆「そりゃ、そりゃ、そりゃ！」

そこへ、砂掛け婆の砂が。

狼男の目の中に入る。

狼　男「(怒り) くくく―――」

牙をむくと、シャニムニ突進して来る。

砂掛け婆が、咄嗟に釜の扉を開く。

狼男は、勢いがついて、その中へ。

狼　男「（悲鳴）ウギャギャギャギャー――――」

63　汽車の屋根

吸血鬼、シルクハットを飛ばす。
ゲタを飛ばしている鬼太郎。
鬼太郎「そりゃ――――！」
飛ぶ二つのゲタは、挟みつけるようにシルクハットに命中。
グシャリとなって落下するシルクハット。
吸血鬼「（焦り）――――！」

64　運転席

ブレーキのレバーを引く猫娘や砂掛け婆。
砂掛け婆「ブレーキが動かん――――」

65　上空

蛇行運転を続ける汽車。

66 汽車の屋根

吸血鬼は、マントを取ると、クルクルと回転させて、ブーメランのように飛ばす。

鬼太郎「くっ――」

鬼太郎の頬をかすめて行く。

さらにマントが鬼太郎の方へ。

鬼太郎、ジャンプすると、空中で回転しつつ、

鬼太郎「そりゃ！　チャンチャンコ！」

ヒュンと、唸りを上げて飛ぶチャンチャンコ。

ガキーンと激突するチャンチャンコとマント。

ブオッと吹っ飛んでいるマント。

吸血鬼「くっ――」

チャンチャンコは、吸血鬼の体に激突。

吸血鬼「うぐ――」
チャンチャンコは、ヒュンと鬼太郎の手の中へ。
鬼太郎、サッとそれを伸ばす。
鬼太郎「チャンチャンコ！」
すると、丸太のようになるチャンチャンコ。
鬼太郎「そりゃ！」
それを、吸血鬼の方へ。
ボコッと吸血鬼の胸に命中。
吸血鬼「うぐぐ――!?」
そのまま後退する。
そこには、煙突が。吸血鬼は、そのまま煙突の中に落下。

67 釜の中

真っ赤に燃える所に落ちて来る吸血鬼。
そのままシュワワーッと消滅。
吸血鬼「ギャワワワー――！」

68

運転席

ブレーキにしがみついている猫娘たち。

猫　娘「鬼太郎――」

と、窓からは、鬼太郎が。

鬼太郎、レバーに手をかけると。

鬼太郎「くっ――」

一気にガコンと引く。

69

上空

暴走していた汽車が、キキキキキーと火花を散らしながらスピードを落とす。

70

山村の中

止まっている汽車。

71 同・汽車の前

汽車から降りて来る鬼太郎たち。

砂掛け婆「大変な汽車に乗ってしまった」

子泣き爺「ああ――」

と、鬼太郎の手には、目玉が。

目玉が、目を開く。

鬼太郎「父さん――。西洋妖怪たちは、全て倒しました――」

目　玉「よっ、よくやった――。やっ、奴らは、地獄へ封印されたんじゃ」

猫　娘「オヤジさんも、凄い頑張りだったもんね」

砂掛け婆「ああ、鬼太郎を助ける為にとな」

子泣き爺「大変な気迫じゃった――」

鬼太郎「父さん――」

砂掛け婆「しばらく療養すれば、元気になるじゃろう」

猫娘たち、『ホッ』と吐息。

子泣き爺「とにかく、このまぼろしの汽車を、閻魔大王の所へ返しに行こう――」

72 夜空

シュポポポーと、汽車が、上空を飛ぶ。

73 車内

座席の所には、鬼太郎たち。

74 夜空

汽車は、満月のシルエットとなる。

ポーポーと汽笛の音――。

おわり

